

# 豊かな心情を育てる指導の強化

足利市立東小学校

研究主題

自分から進んで生活を明るく豊かにする実践力を育てるにはどのようにすればよいか

## 1 主題設定の理由

ここ10年来の本校における重点研究の歴史を振り返って見ると、「主体的な学習態度の育成」という大目標のもとに、国語、算数、体育などの教科学習、それに特活の領域で児童活動などが取り上げられてきたが、徳育的な立場からの研究は一度も取りあげられていない。また、昨年度末に実施された学校評価の結果からも、情操的な面からの指導の強化が必要であるという意見が強かったのである。もとより、「心情を豊かにする指導」という立場は、学校教育のなかの領域的な考え方から、教科の学習や特活などと並列的に位置づけられるものではなく、むしろそのすべての領域の中に溶け込んでいるものと考えられる。したがって、裏を返せば、「主体的な学習態度の育成」というテーマで一貫させてきたここ10年来の研究は、「心情を豊かにする指導」をも内包していたことになる。

しかしながら、改めて「豊かな心情を育てる指導の強化」という観点から本校教育のすべてを眺めた時、そこに必ずや児童と教師が一体となり取り組まなければならない新しい課題が存在するはずであるとの共通理解に達したのである。

## 2 研究のねらい

「心情を豊かにする指導」にしても「情操教育」にしても、その概念規定はなかなかむずかしい。しかし、これを確立してからおもむろに研究に取りかかるという悠長さも許されない。理論研究を進めるかたわら、日々の実践の積み重ねを通して課題解決を図ろうということになった。

先にも述べたように「心情を豊かにする指導」は、本来はば広く学校教育の全領域を通してその深化を図られなければならないものと考えるが、学校の規模を考慮し、研究の焦点化を図るために、共通の実践課題として、今年度は「生活指導」の領域を耕そうということになった。

つまり、全校的な立場で設定される「生活目標」を共通の素材とし、その実現をめざして、児童と教師とが一体となり実践に取り組むことによって、「自分から進んで生活を明るく豊かにする実践力」が育つのではないかと考えた。

なお、「心の指導は環境から」とも言われるたとえに従い、「校内の環境美化」の研究と、小教研における指導法研究会場としての図工科の研究も、あわせて重点研究の一環として進めるということになった。

## 3 研究の進め方

### A 生活指導の研究

- 1 学校全体として設定される生活目標を、学年、学級、個人というように発達段階や実態に即してさらに下位目標として具体化し、それを到達目標として集団指導と個人指導の両面から実践に当る。
- 2 ひとりひとりの児童が実際に実行する場を設定し、その努力のあとが記録できるようにする。

3 教師としては、さらにその評価の方法をほめ方の研究も進める。

4 学年・ブロック・全体における話し合い（研究会）を通して相互研究を深める。

生活目標の設定については、本校児童の実態等を考慮し、全職員で検討した結果、一応の試案として、次の6項目を各月に割りふって取りあげることになった。

- o 礼儀を正しくしよう。 4 月
- o 友だちとなかよくし、助け合おう。 5月・12月
- o 時間を守りきまりよい生活をしよう 6月・11月
- o 物やお金をたいせつにしよう。 7月・1月
- o 学校を美しくしよう。 9月～10月
- o 自分のことは自分でしよう。 2月～3月

#### B 環境美化の研究

「美しい学校づくりへの意欲と実践力をのばす」ということを目標に、児童会・学級会を中心とする児童の自主的な活動を促進させるという方向で研究を進める。なお、月1回の「環境整美の日」、学期1回の「全校作業の日」を設けて実践にあたる。

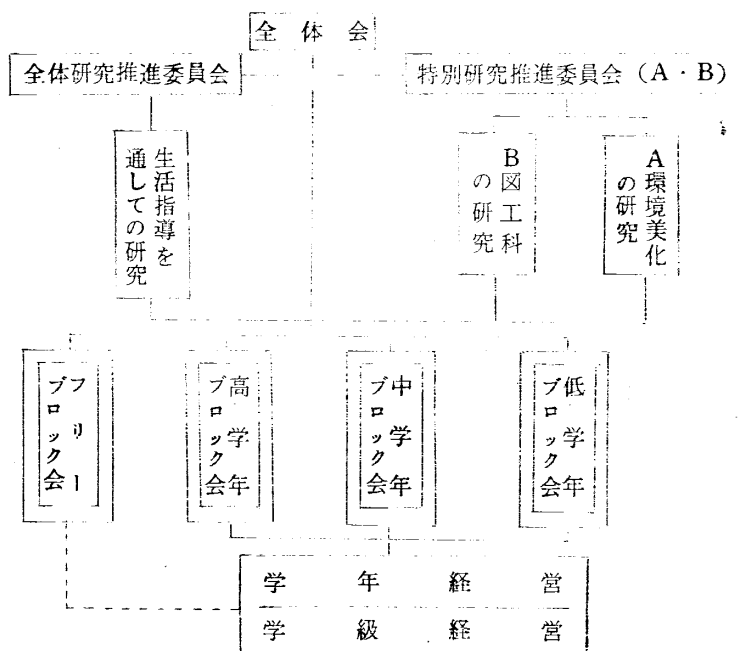
#### C 図工科の研究

「美的情操を養い、創造的表現の能力をのばす指導法のくふうと改善」をテーマに、彫そ・工作の領域を中心に研究を進める。年間2回の指導法研究会を山場として、低学年・高学年の2ブロックを単位とした共同の教材研究会をもち、日常の授業実践を通して研究を深める。

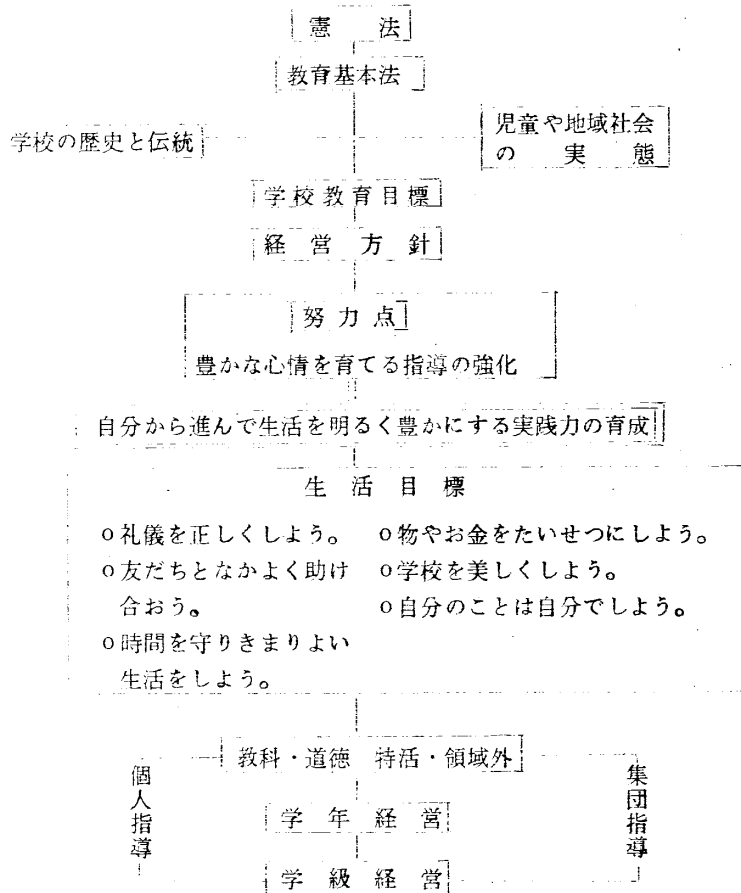
### 4 研究の組織

研究を進めていくうえの柱として、前にも述べたように、①共通素材（生活指導）を通しての全体研究と、②特別研究（A環境美化・B図工科）の2本立てとし、併行させて進められるようにした。

実践研究の母体として規模を考慮し、低学年・中学年・高学年・フリーの各ブロック会を中心として進められるようにした。



なお、参考までに、本校教育活動への重点研究課題の位置づけを図示すると次のようになる。



## 5 研究の経過

月日	研究題目	指導者	提案者	司会・記録
4・24	基礎書の作成	安藤重雄指導主事 堀島弘司指導員	係	田部田・古川
5・15	継続づくりと研究の方向づけ		係	相場・中島
5・29	各ブロックごとの実践書の作成		各ブロック	赤坂・久野
7・3	情報教育についての研究会		係	山田・漆原
7・10	特別研究（環境美化・図工科）		各係	各ブロック
9・24	校内図工科指導法研究会		係	堀越・相場
10・16	低学年・フリーブロックを中心とした研究		各ブロック	赤坂・久野
11・13	特別研究（環境美化・図工科）		各係	各ブロック
12・18	中学年ブロックを中心とした研究		中学年ブロック	八木・宇津木
1・29	高学年ブロックを中心とした研究		高学年ブロック	刑部・渋井
2・12	一年間の研究のまとめと反省	係	竹川・堀越	

## 6 研究内容

### A 生活指導を通しての研究

#### 1 低学年における実践

##### (1) ブロックとしての基本方針

ア 課題について「すすんで生活を改善する意欲を育てるための指導」

イ 研究の仮説 ・実践することの喜びを感じとらせて、教師がひとりひとりをよく知り認め、賞賛を与えていくことが、効果的であろう。

##### (2) 実践例 <10月>

##### ア 生活目標とその具体化

生活目標 → 具体目標 → 個人の実践

学校を ○みんなのためになるよいことを1つしよう。

きれいに ・校庭や教室のごみをひろいましょう。

しよう。 ・花だんの草をむしりましょう。

・・・・（以下略）・・・・

##### ○自分のこと

・ごみはくずいれにすてましょう。

・かさはきちんといれましょう。

・・・・（以下略）・・・・

##### イ 児童の実態

・教室が乱雑になっていても、大多数の児童は積極的に手をつけようとしないのが、実情であった。

##### ウ 実践方法

○ 花さかじいさんの木に花をさかせましょう・・・（第1図・個人カード）

・帰りの会で発表してほめ合い、花びらを1枚そめる。・・・個人指導

・朝の会で励ます。・・・集団指導

○ 花さき山に花をさかせましょう。・・・（第2図・廊下の掲示板・1、2年共用）

・学級で相談して、週に1～2名、良いことをした児童が花を咲かせることができる。

##### エ 結果とその考察

○ 学校の一員としての連帯感が低学年なりに芽生えてきた。

○ 自由時間の過し方に活気が出てきた。反面、学校は忙しいところだという声も出た。

○ 1年生では自然発生的に係りが生れた。・・・おとしものがかり・花づくりがかり

○ 「花さき山」をとり入れたため、童話を読もう、という意欲が出てきた。

##### オ 今後の問題点

○ 生活目標が低学年としては多すぎたので、中心目標をしぼるべきである。

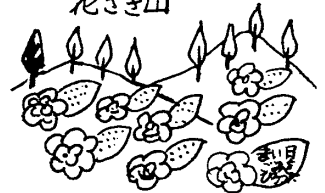
○ 「花さき山」という外部からの刺激がなくなっても、子どもたちが実践するかどうか、今後の課題である。

第1図  
花さかじいさん 月



第2図

花さき山



2 中学年における実践

(1) 中学年の基本方針

本校の研究主題を受けつぎ、中学年としては、「学校生活をより楽しくするための、基本的な生活習慣と実践力を、身につけるための指導」を実践課題として考えた。

(ア) 基本的な考え方

中学年児童の学校生活を見ると、水道や便所の使用の仕方、清掃用具の整理整頓、廊下階段の歩行等、基本的な生活習慣が身につけていない。児童の学校生活をより楽しくするためには、これらの生活習慣を身につけることが大切である事に気づかせ、自分から進んで改善をはからせるようにしたい。

(イ) 研究の仮説

基本的な生活習慣を身につけさせるために目標の設定、成果を表わす尺度の作成、成果に対する賞賛などを通して、進んで目標に迫るようにしたい。

(2) 実践例 (11月)

(ア) ねらい達成のための具体策

生活目標 → 具体的努力点 → 個人の実践

- 時間を守りきま    ○ 日課表を守る
- 楽しい生活をし   ○ 休み時間に次時の学習準備をしておく
- よう。                      ○ 学習にすぐ取り組む

(イ) 実態調査の結果

1日の日課の中で時間が守れないのはいつか。実態調査の結果を、学級指導で子どもたちと話し合い、特に次の5項目を選んだ。

朝会・集会    第1校時    業間休み  
昼休み(そうじ)    第5校時

(ウ) 方法と実践(個人カード) 守れた 10  
守れない -10

アウトセーフ・アップダウン きょうそう

項目	月 日 ~ 月 日 年 組						
	月	火	水	木	金	土	計
1 朝会・集会	10						
2 第1校時	10						
3 業間休み	-10						
4 昼休み	10						
5 第5校時(そうじ)	-10						
6 計	10						

グループごとに毎日記録し反省する(反省会)

週ごとに集計し、目標に向かって努力した者には、努力賞を与える。また反省したことをもとにして、次週の努力点を決める。

※記入上の留意点

室内は走らないこと、セーフ(10点)は約束を守って行動できた者(時刻だけ守ったのはアウト(-10点)にする)

(エ) 結果

- 最初は、業間休み、昼休み、第5校時に(-)点を取る者が目立った。
- 時刻を守るために室内を走る者が目についた。時間だけ守ろうとする者が減った。
- 最近では、特定の児童以外はよく守れている。

(オ) 今後の問題

- 記録のための努力でなく、自分から進んで時間を大切にできる習慣を身につけさせたい。(意識の内面化をはかる)
- 清掃指導の徹底(時間内で終わらせる) 例えば、時間を切って能率的にやるくふう

○ グループ内における助け合いから、全体の協力へと進ませる。(清掃日記の活用)

### 3 高学年における実践

#### (1) 実践の基本方針

「低学年では導き、中学年ではよりそい、高学年ではつきはなす。」という指導上の教師の構えは、この生活指導の領域においても通用するのではないだろうか。高学年ともなると、自我の芽生えとともに、かなりはっきりした自分の考えを持ちそれを主張するようになる。われわれ教師は、ややもするとそれらの考えを無視してしまったり軽く扱ったりしがちであるが、たとえ、それが未熟不完全な意見であっても、児童の自主性を育てるという立場から尊重していかなければならないと考える。高学年ブロックとしては、児童の学校生活における様々な問題場面を取りあげ、児童ひとりひとりの考えを尊重し、児童が自分たちの問題として話し合い、解決していく、という方向で実践研究を進めようということにした。

#### (2) 実践例

##### その1 (5年生)

##### ア 生活目標とその具体化の例

生活目標	学級で設定された努力目標	個人の実践目標(例)
○ 友だちとなかよくし助け合おう。	○ だれとでも仲良くする。 ○ 人のいやがることをしたり、悪口を言ったりしない。	○ ささいなことで口げんかをしない。 ○ 友だちの差別をしない。 ○ 友だちが困っていたら助ける。

上記生活目標の具体化は、①グループ学習などにおける協力性が乏しい。②休み時間の遊びでは、仲間はずれにされる友だちがいたり、グループも固定されがちである。③清掃時には、一部の男子がなまけていてまじめにやらない。・・・などの実態が帰りの反省会等で分析され、その結果から設定されたものである。

##### イ 実践の方法と場

「夢の外国旅行をしよう」・・・(他の例)「国立公園めぐりをしよう」(詳細は略)

- 1日の学校生活を、①学習時間、②休み時間、③清掃時間の3場面に分けて実践する。
- 毎日の帰りの反省会で、おたがいの努力をたしかめ合い、認められると日本地図(個人カード)の都道府県を1つずつぬりつぶすことができる。
- 都道府県を全部ぬりつぶせると、自分が行ってみたい外国へ夢の旅行をする資格が得られる。(掲示されている世界地図に、自分の名前を書いたカードを貼り出す。)
- 図書館などでその外国のことを調べ、みんなにその(夢の外国旅行の)報告をする。(朝の学習時間や給食の待ち時間を利用して。)

##### ウ 考察(成果と問題点)

- 帰りの反省会における話し合いが焦点化され、無駄な発言が少なくなってきた。
- 全児童が書いている生活日記を読むと、「夢の外国旅行が始まってから、いじわるをしたり悪口を言ったりする友だちが少なくなりよかった・・・」という記述が見られるようになった。

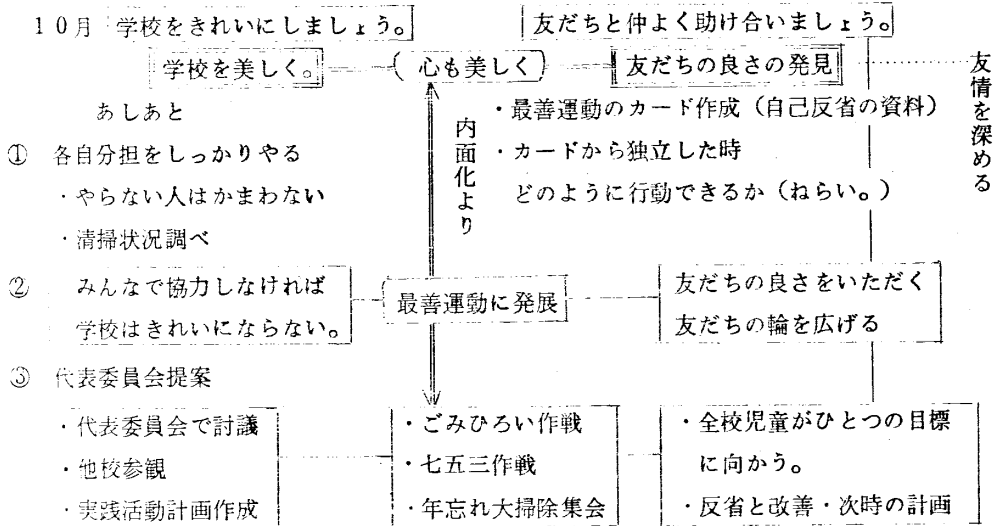
- より価値ある行動をめざして努力しようとする児童が多く見られるようになってきた。
- 児童の変容の姿など、実態把握の方法を科学的に検討する必要がある。(指導上の問題点)

—その2— (6年生) —

1. 実践の基本

最高学年である6年生は、児童会活動を通して、学校のいろいろな行事や集会等の原動力にならなければならない。従って、学校教育目標の児童への働きかけの考え方の基本に、なぜ、だからとの納得と実践への間に段階をなくし密なるものによりスタートした。

2. 実践例 (10月 12月 生活目標の児童への働きかけ)



4. 特殊学級における実践

1. 実践の基本方針

学校をきれいにする第一戦を受け持たせることにより、子どもたちの心の中にある劣等感をとりぞき、明るく仲よく自信をもって生活する子どもに育てたいと思った。

ひとつのことを続けてやり通させること。賞のカード等によりほめることに徹してみた。

2. 実践例

ア 「学校をきれいにしよう。」4月の初めに1年間続ける目標をたてた。天気の良い日は、前庭の花だんの水くれをしたり、花の手入れをする。そうじを力いっぱいやる。・・・と決めた。

イ 児童の実態 6年生1名、5年生3名の男子ばかりのクラス。学力は低く、4名の心はばらばらで、他を非難することが多く、骨の折れる仕事は弱い者に押しつけようとする。すべてに無気力で、強い劣等感を持っていた。

ウ 実践の方法と結果

- 水くれの継続 (朝、固定分担)
  - 清掃状況の評価 (直後)
- いっしょうけんめい進んでやった時は黄色い賞を与え、賞の数をグラフで示す。賞の多い者には大きな賞状を与え

○肥料くれ、球根ほり、球根うえ | る。給食のあと、よくやった人は、次の仕事の予定につ  
草むしり（放課後（10～30分））て話し合った。子どもたちは喜んで仕事をするようになり  
協力体勢も生まれてきている。水くれなど、自分から進んでするようになってきた。

エ 今後の課題として、1年中花の絶えない学校にしようと、子どもたちと話し合っている。

5. 朝会講話をとおして

～豊かな心をどう育てるか～

全校の月曜朝会は、1週間のスタート台であり、児童ひとりひとりと全職員の大切な出会いの場である。特にその中心である幼い魂に語りかける校長講話の在り方こそ朝会の成否を決する極めて重要なものと思う。それだけに私は、本年4月以来、児童の豊かな心を育てるために全力を傾けてきたつもりである。

次の2つの表は、昨年12月末、よりよい講話を生み出す貴重な資料を得るため「朝会講話のアンケート」を全児童に実施し、まとめたものである。

朝会講話のアンケート (表1)

番号	内容	学 年		1年	2年	3年	4年	5年	6年	全 校
		人数	人数	81	52	69	75	72	66	415
1	朝会の話はつまらない。	人 数	人 数	2	3	9	10	4	0	28
		%	%	2.5	5.8	13.0	13.3	5.6	0	6.7
1	おもしろい。	人 数	人 数	79	49	60	65	68	66	387
		%	%	97.5	94.2	87.0	86.7	94.4	100	93.3
2	べんきょうにならない。	人 数	人 数	1	2	4	7	2	0	16
		%	%	1.2	3.8	5.8	9.3	2.8	0	3.9
2	べんきょうになる。	人 数	人 数	80	50	65	68	70	66	399
		%	%	98.8	96.2	94.2	90.7	97.2	100	96.1
3	声をはっきりしない。	人 数	人 数	3	2	6	2	3	1	17
		%	%	3.7	3.8	8.7	2.7	4.2	1.5	4.1
3	はっきりしている。	人 数	人 数	78	50	63	73	69	65	398
		%	%	96.3	96.2	91.3	97.3	95.8	98.5	95.9
4	話し方が早すぎる	人 数	人 数	3	4	9	5	0	2	23
		%	%	3.7	7.7	13.0	6.7	0	3.0	5.5
4	ちょうどよい。	人 数	人 数	78	48	60	70	72	64	392
		%	%	96.3	92.3	87.0	93.3	100	97.0	94.5
5	おぼえていない。	人 数	人 数	37	12	20	22	23	13	127
		%	%	45.7	23.1	29.0	29.3	32.0	19.7	30.6
5	おぼえている。	人 数	人 数	44	40	49	53	49	53	288
		%	%	54.3	76.9	71.0	70.7	68.0	80.3	69.4
6	朝会をたのしみにして いない。	人 数	人 数	4	7	13	29	28	8	89
		%	%	4.9	13.5	19.3	38.7	38.9	12.1	20.4
6	おたのみにしている。	人 数	人 数	77	45	66	46	44	58	326
		%	%	95.1	86.5	95.7	61.3	61.7	87.9	79.6



朝会講話のアンケート (表2)

学年 順位	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	全 校
1	笠じぞう (56.7)	笠じぞう (44.2)	笠じぞう (52.8)	笠じぞう (48.0)	笠じぞう (47.2)	交通安全 (57.6)	笠じぞう (48.6)
2	おくびよう兎 (41.4)	片腕の卓球選手 (40.4)	庭の精 (45.8)	片腕の卓球選手 (34.7)	庭の精 (34.7)	庭の精 (43.9)	庭の精 (32.3)
3	雨にぬれた本 (34.6)	おくびよう兎 (32.7)	おくびよう兎 (37.7)	おくびよう兎 (33.3)	交通安全 (25.0)	笠じぞう (41.0)	交通安全 (31.6)
4	橋の上のおかみ (27.2)	コスモスの花 (30.8)	交通安全 (36.2)	庭の精 (28.0)	コスモスの花 (19.4)	片腕の卓球選手 (36.4)	おくびよう兎 (29.5)
5	交通安全 (25.9)	庭の精 (24.9)	のんちゃんけんちゃん片腕の卓球選手 (23.2)	ビー玉遊び (22.7)	片腕の卓球選手 (18.1)	自分への宿題 (21.2)	片腕の卓球選手 (24.3)

( )内は%

以上のアンケートの結果をもとに、いろいろの角度より反省、検討を加えたわけであるが、今後さらに努力すべき点をいくつかあげてみたい。

- (1) 講話というよりも、児童との対話の機会であるという姿勢で臨むよう心がける。具体的には、時々質問などを入れて児童に呼びかけ一方通行にならないように工夫する。
- (2) 1年生から6年生までという幅広い層を考慮し、話の内容(タネ)の選択や表現の仕方を工夫しわかり易く、親しみ易いものにする。
- (3) 各種の指導技術を駆使し、変化をもたせるとともに、情感に訴えるよう工夫する。
- (4) 内容として童話的なものを適宜とり入れる。そのため創作童話の在り方をさらに研究する。
- (5) お説教的になったり、内容的にも余り道徳的臭みの出ないように工夫する。
- (6) 1回の講話時間は、3分程度とし、内容を欲張らず焦点をしぼるように努める。
- (7) 必ず原稿をかき全文暗記して話すように努めるとともに、時々講話を録音して自己評価をする。

「朝会の講話は、子等の頭上をとび」という川柳のように、校長だけの自己満足にならないように今後も、児童の心をより豊かにするために児童や、職員の声を謙虚にとり入れ、1週1回の校長の研究授業であるとの心構えで、心にのこる講話を研究していきたい。

## B 環境美化を通しての研究

### 1 基本方針

豊かな心情を育てる上で、学校環境の果たす役割りは大きい。「自分から進んで生活を明るく豊

かにする実践力の育成」をめざして、きれいで楽しい学校づくりを全校の目標とし、子どもといっしょに努力することにした。特に環境美化への意識づけと実践力の育成に力を入れる。

## 2 実践例

(1) 環境美化への意識づけ (きれいで楽しい学校づくりについてアンケートをとる。一学級会や各委員会、児童会で話し合う。・・・子どもたちは、校舎内外を回って計画を立てた。)

(2) 子どもたちの実践

ア 登校の時、門から昇降口までの間で、ごみを捨てる。(校庭のごみが殆んどなくなった。)

イ 七五三作戦 753のつく日は特に清掃に力を入れる。(他の日もそうじ熱心となった。)

ウ すすはらい集会 年末に1年から6年までをたて割りの19班に分け、校舎内外のよごれている所をみんなできれいにする集会を実施した。(計画、準備、運営、あとしまつなど、すべてが子どもたちの手で行なわれた。)

エ 学期一度の全校作業の実施

(3) 全職員で校舎内を一巡して整美箇所を探し、分担して処理する。月一回環境美化の日を設け、低・中・高のブロックを中心に、花だん、廊下、教室内の整美に当たった。(これは時間不足)  
また、教室環境整美や学年園経営のための資料配布をし、この面での実践化を図ろうとしたがこれまた時間不足。今後の課題である。

## 3 まとめ

児童会を中心とした自主的な活動により、きれいな楽しい学校づくりへの意欲が盛り上がっている。

### C 図工科を通しての研究

#### 1 基本方針

前にも述べたように、図工科を通しての研究は、「豊かな心情を育てる」という重点研究の一環として取りあげられたものである。いわゆる価値感情として一般的に言われている真・善・美・聖のうち、美的情操面のとうやを図り、創造的表現の喜びを感得させることを通して児童の心情を豊かにしていくことができると考えた。特に、彫塑・工作は材料のもつ立体性や触感性などから、児童の情緒を安定させ豊かな想像力を育てるのにより適した素材ではないかと考え、この領域を取りあげ、教材研究や授業実践を通して研究を進めようということになった。

#### 2 研究の概略

項目	低学年ブロック (1～3年)	高学年ブロック (4～6年)
教材研究会 (7月10日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1年の題材「どうぶつ」の教材研究</li> <li>○土ねんどの性質や扱い方をくふし、創造的な表現力を養うこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○6年の題材「うきぼり」の教材研究</li> <li>○自分の顔をスケッチし、質感の表現をくふうして木板に彫刻すること。</li> </ul>
校内指導法研究会 (9月24日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○授業者 刑部しげる教諭 (1年1組)</li> <li>○題材 どうぶつ (彫塑～ねん土)</li> <li>○ねらい 動物の特徴をとらえ、立体的に表現することの楽しさを味わわせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○授業者 古川 弘教諭 (6年1組)</li> <li>○題材 うきぼり (木板)</li> <li>○ねらい 顔の高低をよく考えて浮き彫りさせ、立体感を表現させる。</li> </ul>

教材研究会 (11月13日)	○1年の題材「かみのにんぎょう」 ○紙の性質を知り、アイデアスケッチをもとに、独創的な人形を考えさせること。	○5年の題材「かべかざり」の教材研究 ○自分なりの目的に合ったデザインをくふうしかべかざりを作ること。
小教研指導法 研究会 (11月21日)	○授業者 刑部しげる教諭(1年2組) ○題材 かみのにんぎょう ○ねらい 円すい形を基本にして色や形をくふうし表情豊かな人形を作らせる。	○授業者 中島 康子教諭(5年1組) ○題材 かべかざり(木版) ○ねらい 技法を知らせ、効果的な彫り方を自分でくふうし製作する力を養う。

### 3 研究の成果と問題点

- 1) 作品を掲示される事により意欲の中で低学年では、ぼくもかざりたいといった単純な心情から高学年になると、ぼくもよいものをつくろうという、より積極的な心情がみられる様になった。
- 2) アイデアスケッチを書いて製作する事は、自分の作りたいものを十分に表現できるのでよい。
- 3) 表現された作品だけをみて評価しすぎるきらいがあるが、題材が決まり一構想を練り一表現をする。この一連の過程に於ける「心的なはたらき」をも感受するよう努めなければならない。
- 4) 低学年では、独立した教科と考えないで総合的な指導が望まれている。
- 5) 図工科は技術のみを重視せず各自、自分のものを生み出す工夫苦勞が大事である。指導する前に教師自身が作ってみる時間がほしい。
- 6) 感動したところを大きく表現するという事は、低学年では自然に持っている。しかしそれを大人のものとして無理に持っていくことはむずかしい。デザイン的なものとして、あるいは絵画として、デフォルメするかによって持っていく方はちがってくる。

### 7 研究討議 生活指導の面に限って

#### 1 低学年の実践について

- 「花さき山に花をさかせよう。」という低学年ブロックの発想は、童話的で発達段階に即しておりすばらしい。子どもが喜んでとびこんでいける方法だ。ただ、子どもというものは、ひとつのことを長く続けていると飽きてしまうものだから、この指導を長続きさせる工夫が必要である。
- 学級指導から学級会へと、自然な姿で研究が進められた点はすばらしい。中・高学年でも、低学年での実践を子どもたちに紹介し、中・高学年なりの発想を生み出す刺げき剤にしたい。

#### 2 中学年の実践について

- 「アウト・セーフ、アップダウンきょうそう」は、やはり中学年児童の発達段階としてきわめて適切であると思うが、今後の方向転換が課題のひとつになると思う。(マンネリ化防止)
- 生活目標の具体化ができて、子どもたちが実際に活動する共通の場を設定してやらないと実践がうまくいかないものであるが、中学年として具体的に実践の場を設定した点はよかった。
- グループで反省し合う場合など、気の弱い子どもがすぐに教師のところに泣きついてくるなど子どもたちの話し合いの姿勢に指導を要する面があるが、一方子どもどうしのみがき合いということの必要性も、改めて再確認しなければならない。

#### 3 高学年の実践について

- やはり高学年らしい発想にもとづくユニークな方法である。また、6年生の実践例にあるように、児童活動として実践を盛り上げる原動力となったりして、「自分から進んで・・・」というテーマにもかなり迫れたのではないだろうか。
- 1か月にひとつあるいは2か月にひとつという生活目標は多すぎたのではないかという意見もあったが、子ども自身のとらえ方を重視し、核になるものを決めて他のものをその周辺に位置づけていくという方法が考えられる。これは、生活目標の構造化として全校的な今後の課題である。

## 8 まとめと今後の課題

これまでに述べた事項については、実践の一部をとりあげたに過ぎない。したがって意をつくせぬ感はあるが、歩んできた筋書きはご理解いただけと思う。次に総括的なまとめと、今後の課題についてふれておきたい。

### 1 研究の成果とみられるもの

#### (1) 研究態制の確立と学校総ぐるみ実践化の定着

昭和48年度の実践をとおして残された問題点が、先進校の資料を生かし、学校評価という場を通して分析し、統合して共通理解を深めていく過程から、本年度の重点研究課題が設定された。それだけに研究態制は益々強固なものになってきたのであるが、これは一つの成果といえよう。

本校は、教職員、児童もすべて総ぐるみで足利学校の学燈を伝承し、「自主独立」、「自学自習」の精神が、先輩たちの汗と努力により、善美な校風として生きていることを誇りに思い、いっそう高揚するためのランナーとしての責務を感じている。したがって創造の意欲ももりあがり、職員間や児童会から次々と新鮮なアイデアが出され、児童教職員総ぐるみによる強力な実践活動が展開されたのである。組織体としての学校運営の中で、総力をあげての実践こそ、何よりも尊いものであり、それが個々の努力によって定着化しつつあることに深く感謝したい。

#### (2) 本校教育目標への接近

わたしたちが、共通理解の上でとらえているよい子の像は、学校教育目標の中に生きている。それを、より具体化すれば、「両崖の松のように たくましい子ども」、「渡良瀬の小石のように強い心の子ども」、「行道に咲く野菊のように やさしい子ども」、「三栗谷に湧き出る泉のように、豊かな創造力をもつ子ども」のすべてが生活の中に自然とにじみ出る子どもの姿である。

実践例の各所に子どもの変容の様子が述べてあるが、わたしたちの実践によって、学校教育目標への接近がはかられたといえよう。

#### (3) 新しい課題の発見

自分から進んで生活を明るく豊かにする実践力を育てる営みは、各ブロックのチームを作り、子どもと四つに組んでの実践でぎった。一年間の歩みを静かに反省しての研究討議の中から、本年度の課題が発見されているということは、研究をつづける同志のみ体験できる希望への道であり、さらに、それに向って進もうとする意欲のもりあがりは、大いなる成果といえよう。

### 2 今年度の実践から残された課題

- (1) 生活目標を吟味し、精選し、構造化する。――生活目標を価値の高い核のもとに構造化する。

- 2) 子どもの変容を科学的にとらえる。——質的変容の姿をとらえるくふうをする。
- 3) 子どもの内面的をはかるくふうをする。——道徳の時間の質的充実への指向をはかる。

### 3) 研究同人

・校長 中村 章 ・教頭 佐藤行雄 ・低学年ブロック 刑部しげる, 渋井シズイ, 八木庄吉, 宇津木トミ子, ・中学年ブロック 赤坂政子, 久野信弘, (山田久雄) 藤倉 昇, 漆原芳三, ・高学年ブロック, 中島康子, 相場邦一, 古川 弘, 田部田幸子, ・フリーブロック 堀越健三, 竹田美江, 小林和子, 関根幾子, 柳田栄子, 加藤勝治 (川田昌宏)

## 評

全校をあげて「豊かな心情を育てる指導の強化」に研究課題を焦点化し、今回その成果の一端を発表されたことに対し敬意を表したい。東小に限らず足利全市的な要請がこの「豊かな心情の育成」にある現在、この実践記録のもつ意味はきわめて大きい。ことに研究への姿勢—理論研究を進めるかたわら、日々の実践の積み重ねを通しての課題解決へせまる基本姿勢や、生活指導に焦点化しての研究、さらに、ねらいの明確化と具体化の研究、子どもの自主、自律、自発性の育成を目標にすえながらも児童への具体的方法による動機づけの工夫等、この研究内容には参考になるものが多い。しかし、この研究をささえている大きな特色も忘れるわけにはいかない。それは、校長の朝会講話にみられるような、幼ない魂に語りかけるというような教師の謙虚な心であり、子どもを大切に、子どものために教師はどうあるべきかを絶えず考えながら研究を続けられたことである。